

Bridgestone Motorsport 60周年記念

「極限」へのジャーニー

2023年3月10日

株式会社ブリヂストン
取締役 代表執行役 Global CEO

石橋 秀一

1/24

皆さんこんにちは。Global CEOの石橋です。
本日は、お越し頂きありがとうございます。

タイヤメーカーとして様々な挑戦の原点でもあるモータースポーツ。

ブリヂストンモータースポーツの60周年を皆様と一緒に、
日本のモータースポーツのホームグラウンドの一つであるここ、
富士スピードウェイで迎えられることを、とても嬉しく思います。



「極限」への 「挑戦」



2/24

本日の会場となっている富士モータースポーツミュージアムに、
「モータースポーツの始まりは、19世紀末、フランスで開催された自動車レース。
蒸気、電気、ガソリンエンジンと動力源の異なる車両が競い合うことで、
技術的優位性を証明しようとしたものであり、その後も、
クルマの性能や耐久性の極限を求めることで、夢や憧れを時代にもたらしてきた。」
「モータースポーツで磨かれた技術が、量産車開発に反映され、
モビリティの進化に貢献してきた。」
「モータースポーツがクルマを鍛え、進化させてきた」とあります。

私自身も、モータースポーツファンの一人として、
極限を追い求めるモータースポーツに夢や憧れを持っています。
また、個人的には、レースを見るたびに、速いものは美しい、
その境地がまさにモータースポーツであると、感動をもらっています。



日本、アジア、グローバルへ
安心安全な移動を支える

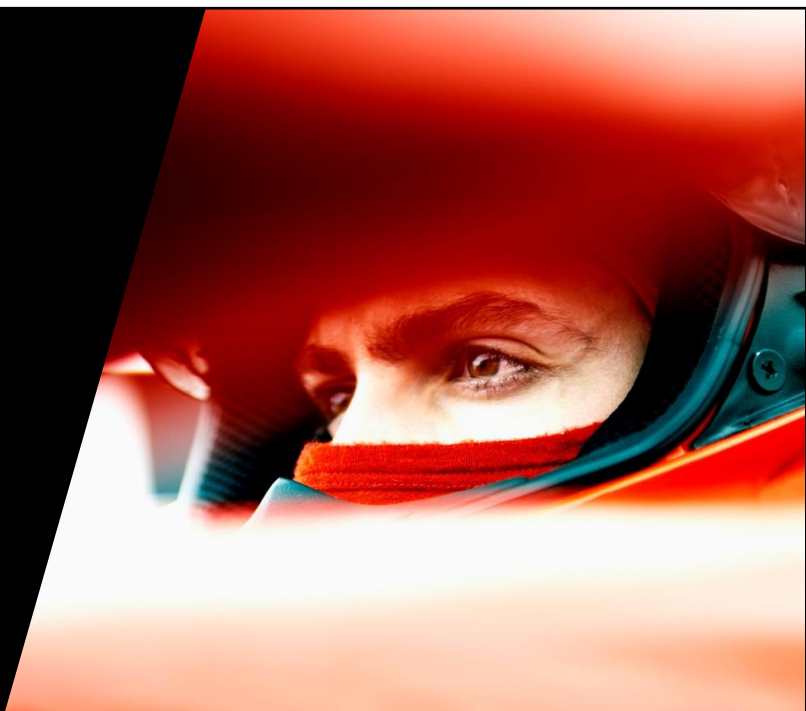
3/24

そして、この歴史は、ブリヂストンにも重なります。
今年3月1日に創立92周年を迎えた当社は、
1931年に福岡県久留米市で創業して以来、
最高の品質で社会に貢献を使命として、
日本・アジアのモータリゼーションを支え、
88年のファイアストーン買収を契機にグローバルへ事業を拡大。
人々の安心安全な移動を支え続けてきました。

そのタイヤメーカーとして「支える」というパッション、技術力、総合力、ブランド力を
磨いたのがモータースポーツです。

タイヤは
生命を乗せている

4/24



当社にとって、モータースポーツはまさに「極限」への「挑戦」。

クルマ、ドライバーが極限の状態で挑戦を繰り返すレースの中で、
「タイヤは生命を乗せている」を大原則に安心安全を守り、
クルマの動きを支えるための「挑戦」を繰り返してきたことが、
今日のブリヂストンに繋がっています。



「極限」の状況で、安心安全を守り、
クルマの動きを支える挑戦



当社の挑戦は、日本近代モータースポーツの進化と共にありました。

1960s

ブリヂストン
モータースポーツの挑戦

6/24



1962年に鈴鹿サーキット、65年に、ここ富士スピードウェイが完成。
国内モータースポーツが活性化するのと時を同じくして、
63年の第1回日本グランプリへ参戦。
ブリヂストンの挑戦が始まりました。

翌64年の第2回日本グランプリからは、
トヨタさんとスポーツカー用タイヤの共同開発を開始。

1970s

世界への出発点



1976年
F1® 日本グランプリ参戦

7/24

73年にはル・マン24時間レース、
76年に、富士スピードウェイで初開催されたF1日本GPに参戦。
世界最高峰レースへの挑戦のファーストステップを踏みました。

1980s ~

世界へ挑戦の土台づくり

8/24



1981年
ヨーロッパF2参戦



1991年
DTM参戦

その後も、様々なレースで技術を磨き、世界へ挑戦する土台作りを加速。

戦いの場を広げ、

81年、ヨーロッパF2へ参戦。1年目でブリヂストン装着マシンが初勝利を上げました。

91年には、2輪の世界選手権（WGP）にフル参戦。

4輪では同年、DTM（ドイツツーリングカー選手権）へも参戦し、
その後のMoto GPや、F1参戦などに繋がっています。

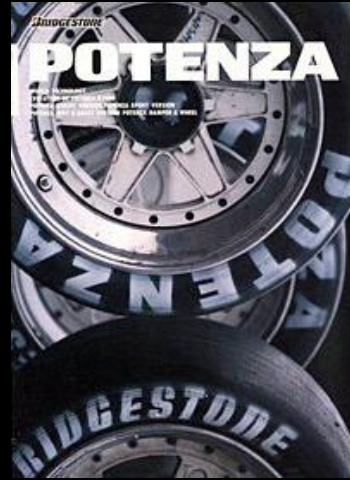
1980s

グローバルプレミアム タイヤブランド構築

‘79 「POTENZA」 ブランド誕生

‘84 「POTENZA RE71」 発売

‘86 「POTENZA RE71」
ポルシェ 959 標準装着



9/24

このような挑戦を通じて、
70年代後半から80年代にかけては、モータースポーツで培った技術、
ブリヂストンブランド力がビジネスにもインパクトを与え始めた時期でした。

実は、私はこの時、20代後半から30代初めで、
商品企画・マーケティングを担当していました。

79年には、今でも多くのお客様に支持頂いているスポーツタイヤ、
「POTENZA」ブランドを投入。

84年にPOTENZA RE71を発売し、86年には、ポルシェ959に標準装着され、
グローバルプレミアムブランドへの第一歩となりました。

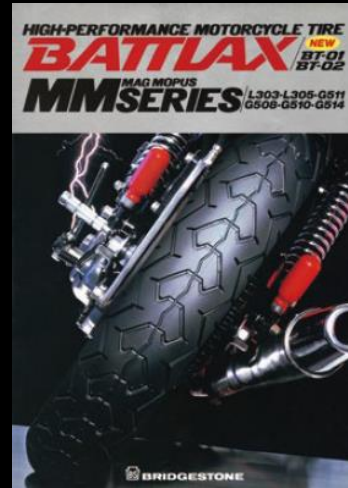
今でもモータースポーツで磨いたブランド、タイヤ技術が
やっと世界に認められたという達成感・嬉しさをはっきり覚えています。

1980s

グローバルプレミアム タイヤブランド構築

‘83「BATTLAX」誕生

‘85「BATTLAX」鈴鹿4耐参戦



10/24

また、モーターサイクル、2輪レースの広まりにも応え、
ブリヂストンで初めての高性能バイクタイヤ
「BATTLAX」ブランドを83年に立ち上げました。

当初、鈴鹿4時間耐久のテスト走行の際には、誰も相手にはしてくれず、悔しく、
BATTLAXを絶対にグローバルプレミアムブランドへしようという想いを
強く持ちました。

その後、85年に鈴鹿4時間耐久に正式参戦。
表彰台に乗り、翌86年にブリヂストン装着バイクが初優勝を成し遂げました。

レースの中で商品を磨き上げ、MotoGPへの参戦なども通じ、
昨年には鈴鹿8時間耐久レースでブリヂストンタイヤ装着チームが
15年連覇を達成するまでに成長しています。

現在、当社の2輪タイヤビジネスは、スポーツ・プレミアム領域において、
グローバルでトップポジションにあります。

1995

INDY500 復帰

FIRESTONE PRIDE



11/24

そして、90年代。ブリヂストンがファイアストンを買収し、グローバルカンパニーへの挑戦を始めるのと同じくして、モータースポーツの挑戦も米国、そして本格的に世界を舞台としていきます。

まず、ブリヂストンの技術力をファイアストンブランドに宿し、95年INDY500へ復帰。

1911年のINDY500最初のレースで、優勝したマシンの足元を支えたのはファイアストーンタイヤ。買収当時、低迷していたファイアストンを、INDY500にカムバックさせ、ファイアストンのプライドを取り戻すべく、様々な困難にも立ち向かったこの挑戦は、買収後のファイアストンとブリヂストンを繋ぎ、現在のグローバルに広がりを持つ経営体制の基盤ともなっていると感じています。

また、現地でこの挑戦に立ち向かったチームの一員として、翌年のチャンピオン獲得は、チームのファイアストーンプライドを呼び覚まし、私のキャリアの中でも最高にうれしかった瞬間でした。

1990s

そして、舞台は世界へ

12/24



そして、INDY500での勝利を布石として、世界、グローバルへ。

ブリヂストンブランドを背負って、97年にF1に参戦。
世界を転戦するグローバルモータースポーツを支えるという、
まさに、極限の挑戦が始まりました。

現在は、世界のサーキットから少し遠ざかってしまっていますが、
ブリヂストンは、90年代に、F1モナコグランプリ、INDY500、
ル・マン24時間耐久レースという世界3大レースを走り、表彰台に上がっています。

1990s ~

1997年~2010年

F1® 参戦



2002年~2015年

MotoGP™ 参戦



13/24

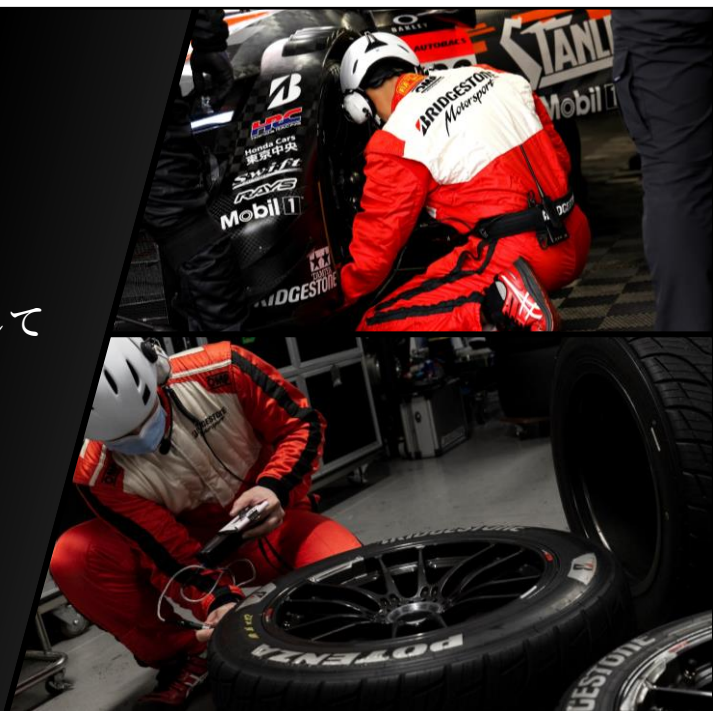
F1に加えて、2002年には2輪の世界最高峰レースMotoGPへも参戦。

4輪、2輪で世界の頂点に挑戦し続けた経験は、
2003年から導入した当時のタグライン
「Passion for excellence」にも代表されるように、
私たちブリヂストンにタイヤメーカーとしての情熱をもたらしました。

「極限」の状態で使用されるタイヤの技術・開発力を
「極限」まで研ぎ澄まし、
世界中を短い期間で転戦するレースへのタイヤ供給という「極限」の状態での
オペレーション、メンテナンスなど、
今日の当社のビジネス基盤ともなる総合力を磨き上げました。

「極限」への「挑戦」を通して
得られたもの

14/24



そのパフォーマンスを皆様にレースを通じて証明することで
ブリヂストンブランドをグローバルでプレミアムへと押し上げ、
グローバルプレミアムポジションを構築、強化することができました。

これらの挑戦は、お客様からの信頼を獲得し、
現在当社がグローバルカンパニーとして世界中でプレミアムタイヤを基盤とした
ビジネスを展開できる原動力となり、そして、この「極限」への「挑戦」を通じて、
エンジニアからビジネスパーソンまで、当社の様々な事業領域において、
人財を育てることに貢献しています。

極限へのグローバルジャーニー

サステナブルなグローバルモータースポーツへ

15/24

モータースポーツの黎明期から100年以上たった今、
ミュージアム展示にもある通り、モビリティは新たな転換期を迎えています。
レースという過酷な「極限」の環境下での技術開発を通して、
次世代のモビリティへつなげる「モノづくり」の新たな挑戦が始まっています。

当社も、2020年を第三の創業として、
新たなモビリティへの挑戦のスタートを切り、
サステナブルなソリューションカンパニーへの変革を加速しています。

その起爆剤となるのが、「極限」の状況で、
最大のパフォーマンスが求められるモータースポーツです。

60周年を機に、タイヤメーカーとしての「原点」に立ち戻り、
極限へのグローバルジャーニーへ再度踏み出し、
モータースポーツ文化の発展を支え続け、リアルとデジタルを組み合わせた
サステナブルなグローバルモータースポーツ活動として進化させていくことに挑戦します。

サステナブルな
グローバル
モータースポーツ
「起爆剤」

サステナブルな
ソリューションカンパニーへ

経営の極限 – アジャイルでサステナブルな経営を実現

16/24

モータースポーツ活動は、「タイヤを「創って売る」、「使う」のバリューチェーン全体における技術力、オペレーションの総合力、ブランド力、人財育成など、企業経営を構成する全ての要素を凝縮したものであると、我々は60年の歴史の中で学んできました。

そして、サステナブルなソリューションカンパニーとしての経営の「極限」の形もそこにあります。

サステナブルな
グローバル
モータースポーツ

「起爆剤」

サステナビリティ

誇り・パッション

ブリヂストンDNA

「品質へのこだわり」「現物現場」

「お客様に寄り添う」「挑戦」

技術力・総合力・ブランド力・人財育成



経営の極限 – アジャイルでサステナブルな経営を実現

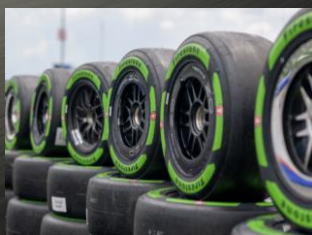
17/24

サステナブルなグローバルモータースポーツを推進していくことによって、
経営をさらに強くし、
経営の中核であるサステナビリティ、ブリヂストンとしての誇りやパッション、
「品質へのこだわり」「現物現場」「お客様に寄り添う」そして「挑戦」の
4つのブリヂストンDNAも極めて行けると考えています。

現在、そして、これからの経営に必須な変化に素早く対応する力である
アジリティをも包含し、
アジャイルでサステナブルな経営を実現していくための起爆剤としていきます。

サステナビリティにおいても

「極限」に挑戦



グアユール INDYタイヤ



グリーン&スマートファクトリー

18/24

中核のサステナビリティについては、
これまで培ったタイヤメーカーとしての総合力をさらに磨き、
「極限」に挑戦することで、サステナブルにモータースポーツを足元から支えています。

この当社のサステナビリティへの取り組みは、
国際自動車連盟（FIA）の環境マネジメントプログラム、
「FIA環境認証プログラム」において、最高位である3つ星を獲得しています。

サステナブルなグローバルモータースポーツ活動への中核となるのは「新たなプレミアム」
と位置付けるENLITEN。
安心安全、運動性能と環境性能を両立する革新的なタイヤ基盤技術ENLITENを、
商品、ビジネスモデルへとその価値を広げ、
サステナビリティを軸として進化させていきます。

さらに、それと連動してタイヤを構成する重要な材料である天然ゴムを、
乾燥地帯で栽培できるグアユールという植物から採取、
再生可能資源比率の高いタイヤ開発や、
カーボンニュートラルやサーキュラーエコノミーを実現する生産技術を結集した
グリーン・スマートファクトリー、
物流網を含めたグリーン・スマートなオペレーションへ挑戦します。

サステナブルな
グローバル
モータースポーツ
「起爆剤」



サステナブルなグローバルプレミアムブランドへ

19/24

また、ブリヂストンブランドも次のステージへ。
これまでのモータースポーツで築いた基盤を大切に、
サステナブルなグローバルプレミアムブランドへと進化させていきます。

サステナブルなモータースポーツ

モータースポーツ文化の発展を支える



Bridgestone World Solar Challenge



SUPER GT



INDYCAR SERIES



EWC/鈴鹿8時間耐久ロードレース



Bridgestone FIA ecoRally CUP

60周年記念企画

Bridgestone
eMotorsport
Institute

POTENZA Circuit Challenge

このような意気込みを踏まえた本年のモータースポーツ活動は、サステナビリティとモータースポーツ文化の発展を支える2つの軸で展開していきます。

サステナブルなモータースポーツとしては、当社が2031年までタイトルスポンサーとして支えるソーラーカーレース「Bridgestone World Solar Challenge」へのサポートに加えて、その裾野を広げ、カーボンニュートラルなモビリティ社会の実現を支える為、新たにFIAが推進する電気自動車の国際レース「Bridgestone FIA ecoRally CUP」へ、オフィシャルパートナーとして協賛することを発表します。

モータースポーツ文化の発展を支える活動として、e-motorsportsへのサポートなどを通じ、地道に裾野を広げることに挑戦。

そして従来からの活動、4輪では国内SUPER GTや、INDYCAR SERIES、2輪耐久レースのFIM世界耐久選手権へも参戦を続けます。

4輪、2輪、デジタル、トップカテゴリーレースからアマチュアドライバーによる参加型レースまで、広く地道にサポートを続けてまいります。

ぜひ、今後のブリヂストンモータースポーツにご期待ください。

Bridgestone deeply thanks the drivers,
riders, teams, manufacturers, organizers,
and those who love motorsports
who share our journey.



最後に、これまで60年間の当社の極限へのジャーニーと一緒に歩んできた従業員、仲間たち、共に挑戦し、そばで支えて頂いた関係者の皆様、挑戦を見守って頂いたモータースポーツのファンの皆様に、心から感謝を申し上げます。ありがとうございます。

本日は、これまでブリヂストンの挑戦と一緒に歩んで頂いた皆さんにも、後ほど登場頂きます。

現在、監督として2輪の世界耐久選手権で世界に挑戦し続けていらっしゃる藤井正和さん。その挑戦を、しっかりと足元から支えてまいりますし、グローバルヘモータースポーツ文化を共に広めていきたいと思います。

星野さんは、当社のF1初参戦を雨の中一緒に戦い、国内トップフォーミュラレースでも挑戦を共にしました。POTENZA RE71発売の際にも、イベントでドライビングレッスンをして頂いたり、現在も監督としてSUPER GTなど、当社のモータースポーツや商品の進化を共に歩んで頂いています。

佐藤さんは、ブリヂストンでF1、ファイアストーンでインディと、共に世界のレースを走り続けています。2017年の日本人としてのINDY500 初優勝は、私も自分のことのように嬉しかったですし、勝利の後、当社の従業員ともミルクで乾杯頂いたり、Firestoneプライド、そして、ブリヂストンのプライドも熱いレースによって、感じさせて頂きました。これからも、足元で一緒に戦っていきます。

佐々木さんは、現在、TOYOTA Gazoo racingで共に走り続け、POTENZAの開発ドライバーをお願いしており、レーサー目線でタイヤ性能を磨いて頂いています。引き続き、日本のモータースポーツと一緒に盛り上げていきましょう。

また、この場にいらっしゃる
往年の名ドライバーであるのはもちろんのこと、POTENZAの開発、ポルシェへのアプローチで
多大なる貢献を頂いた黒澤さん、
ブリヂストンのカートタイヤの生みの親であり、ル・マン、F1参戦、
今はSUPER GTと一緒に戦っている鈴木さんにも、改めてこの場で感謝申し上げます。

このほかにも、モータースポーツを通じて、世界中の多くの仲間たちとの出会いがあり、
今日も多くの方にご来場いただいております。まさにブリヂストンの宝です。ありがとうございます。



Bridgestone E8 Commitment

Emotion

心動かすモビリティ体験を
支えることにコミットする。



そして、ブリヂストンは、
10年後も20年後も走るワクワクを提供し続けるという決意と、
これからもモータースポーツ文化の発展、
心動かすモビリティ体験を支えるというパッションを持って、
サステナブルに走り続けます。

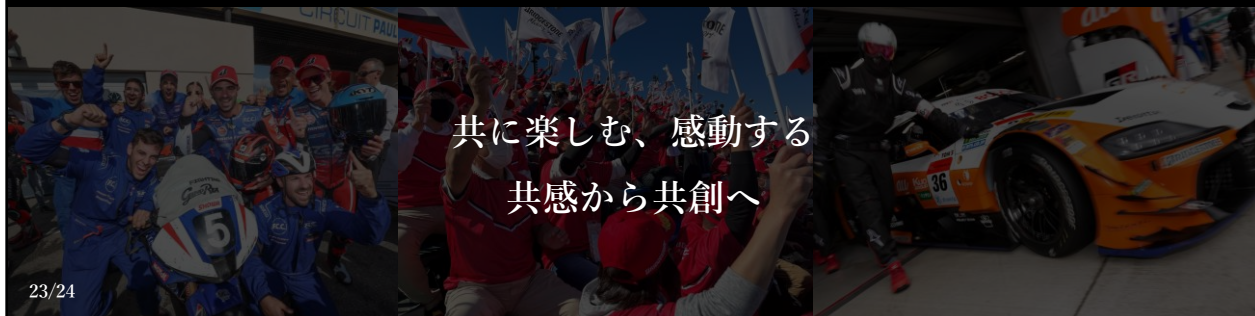
その約束を、昨年発表した企業コミットメント「Bridgestone E8 Commitment」の
中の「Emotion 心動かすモビリティ体験を支えることにコミットする」に込めました。



Bridgestone E8 Commitment

Emotion

心動かすモビリティ体験を
支えることにコミットする。



Emotion、パッションを大切に、多くの仲間たちとモータースポーツを共に楽しみ、感動を共有することで、当社の挑戦に共感を頂き、持続可能な社会の実現に向けて、未来を共に創っていく、共創へとつなげていくことを目指していきます。



Bridgestone E8 Commitment

Emotion

心動かすモビリティ体験を
支えることにコミットする。



ここにいらっしゃる皆様や、当社の従業員、社会、パートナー、お客様と一緒に、サステナブルにモータースポーツのエンジンを回し続け、盛り上げることで、この「極限」へのジャーニーを加速していきたいと思えます。

どうぞよろしくお願い致します。

ご清聴ありがとうございました。



Copyright © Bridgestone Corporation

以上